

答辞

厳しい冬の寒さも徐々に和らぎ、校門の桜の蕾が膨らみ始める季節となりました。

本日は、私たち卒業生のためにこのように厳かで、晴れやかな卒業式を挙行していただき、心より感謝いたします。また、校長先生をはじめ、来賓の皆様、在校生の皆様から励ましのお言葉をいただき、心から御礼申し上げます。

さて、私自身、答辞の機会をいただき、改めて高志高校での三年間を振り返りました。

二兎追う者は一兎も得ず、という諺がありますが、私の三年間は、五兎も六兎も追った三年間でした。

高校に入ってすぐ、「高校では、二兎追うものは一兎も得ず、ではなく、二兎も三兎も追ってください」と言われました。当時、私は病気に苦しむ人を救う仕事でした。ことから、高校の勉強を頑張り、医学部に進学して臨床医になろうと考えていました。一方、他にやりたいことが出来た時に役に立つよう、勉強以外のチャンスにもどんどん食らいつこうと決めました。そこで、幼い頃から継続してきた水泳とピアノに加え、E S S部に入部し英語デイベートにも挑戦しました。また、取り組み方がよくわからなかった課題研究でも、一緒に頑張ってくれるメンバーが集まり、面白いテーマを見つけることができました。初めの頃は、英語デイベートで英語が聞き取れなかったり、課題研究では仮説が立てられないなど挫折も多くありましたが、乗り越えれば必ず成功があると信じて奮闘しました。コロナ禍一年目ということもあり、何かと制限の多かった一年でしたが、こうして五兎六兎を追い始めることができました。

高校二年次には、挑戦をさらに深めました。英語デイベートでは、同じ結論でも相手の論の流れによって自分たちの論を変えたりと、話し合いを重ねて戦略を複雑化しました。それでも全国の強豪校には勝てない日々が続きましたが、大会のたびにメンバーと一緒に反省会をし、時に

はぶつかることもありましたが取り組み方や論を改善することを何度も繰り返しました。失敗で終わらせず次に活かすことを繰り返せば、いつかは結果に表れると信じて頑張りました。こうして、引退試合となる冬の全国大会では五位に入賞することが出来ました。

水泳では、記録向上のために始めたジムトレーニングが身を結び、インターハイと国体への出場権を得ることができました。課題研究でも、自分たちなりの仮説を立てることができ、京都大学サイエンスフェスティバルで入賞できました。実験は難しくても、そこで未知の課題を解決することの楽しさを感じました。周りの友人の影響で、理数グランプリや脱炭素プロジェクトなど新しい事にも挑戦できました。高校二年生では、忙しかった反面、重ねた努力が最終的に実を結んだことも多く、挑戦することにやりがいを感じ始めました。色々チャレンジを続けたことで、どの世界にも上がっていることを知り、毎日ワクワクしていました。また、失敗を沢山してそれを生かすことと、チームで物事に当たることの素晴らしさを学びました。

そして、この頃には、どの大学の医学部に進学するかを考えようと、様々な大学の医学部の話を聞きました。コロナ禍でいずれもオンライン開催だったので、むしろ一日に複数の学校の話を聞くことも叶い、選択肢が広がりました。素敵だと思う大学もあれば、ここは私には合わないなどと思う大学もありました。その中でひとつ、一際心惹かれる大学がありました。この大学は素敵だな、ではなく、この大学じゃないと駄目だ、この大学で学べなかつたら絶対に後悔すると思いました。そして志望校を上げることになりました。また、志望校を変えたのに合わせて、研究医の道も考え出しました。今までは、病気になるればすぐに対応してくれる臨床医の姿に憧れを抱いていました。しかし、医学部の話を聞き回ったことで、世の中には医師にかかってもその先に有効な治療法がなく、絶望する人もいることを知りました。研究の楽しさや難しさを高校で経験できたのも何かの縁だと感じ、研究の道に進み、治療法がなく苦しむ患者さんのために新たな治療法を見つけようと決めました。でも、新しい志望校を周りに言えば、きっと笑われるだろうなと思っていましたが、家族も先生も周りの友人も、応援してくれました。誰にも否定されなかったことは私にとって大きな支えとなりました。今でも感謝しています。

一番つらかったのは高校三年生前半でした。ありがたいことに、夏の水泳の北信越大会ではインターハイ出場権獲得を期待されていて、同じく夏のSSH研究発表会全国大会の高志高校代表にも選んで頂いていました。しかし、毎日授業を終えて、放課後には受験に向けて勉強する友達を見ながら七時まで実験をし、夜には水泳の練習に行き三〜四キロ泳ぎ、自分は全く勉強時間を確保できないという生活は、かなりつらいものでした。辛い中で常に頭の中にあっただのは、「やりたいことが決まり、志望校を上げたいま、勉強時間を失うというリスクを負ってまで水泳や高校の研究をする選択は本当に正しいのか」という疑問でした。五兎も六兎もと心に決めた私でしたが、高校三年生になって本格的に受験を実感すると、余裕がなくなりました。自分の努力も無駄になり、進路も叶えられないかもしれないという恐怖で、授業中でも気を抜けば涙が出てくるほど精神的に疲弊していました。その上、六月には右指を剥離骨折してしまい、勉強中も、当然泳いでいても、常に肉体的な痛みが伴う日々が続きました。満身創痍で、それでも、高校二年生の頃もそうだったように、この苦しみは必ず結果として表れると信じて諦めませんでした。しかし、北信越大会では結局〇・一〇秒の差でインターハイを逃しました。研究発表会でも、色々な人に自分たちの研究の面白さを共有することができましたが、一方でデータの甘さを指摘されるなど厳しい意見ももらい、消化不良なまま研究を終えることになりました。そして水泳や研究が終わり残ったのは、勉強が周りより遅れているという現実と、早く追いつかなければという焦燥感でした。

努力がすぐには結果に現れない苦しい時が流れましたが、大学入試の日はやってきました。面接では「うちの大学では代々ナンバーワンではなくオンリーワンを目指すという研究理念があるが、オンリーワンになるにはどうすればよいと思うか」と聞かれました。私は高校時代の挑戦の日々を思い出しながら、「興味のあるものを見つけて、誰にバカにされようとそれを貫くことです。」と答え、初めは周囲から笑われていても、自分の意志を貫いて成果を出した経験を挙げました。あの答えが即答できたのも、高校での生活があったからであり、周囲の皆さんの支えがあったからだと思っています。

さて、私達は四月からそれぞれの道を歩み始めます。先が見えない時代になると言われていた社会はまさしくコロナ禍により現実のものとなりました。そして、自分勝手な行動による事件などが国内だけでなく世界レベルで毎日のように報道されています。私たちは高志高校の卒業生として、克己・創造・敬愛の精神を忘れることなく、人と力を合わせ皆の幸せのために尽くすことが、社会の一員としての務めだと思えます。私は、研究医としてその務めを果たしたいと思えます。

後輩の皆さんへ。全員に直接伝えることはできませんが、高志高校では沢山のチャレンジをしてほしいと思えます。もちろん失敗することもありますし、その時はつらいと思えます。しかし、そのつらさは未来の成功に向けた一つのプロセスに過ぎません。諦めると癖になってしまいますから、失敗を避けるよりも、失敗をしたあとどう次に活かすかを意識してほしいと思えます。

先生方には引き続きそのサポートをお願いいたします。

それから、卒業生みんなのご家族へ。仕事や家事で疲れている日があっても、今日まで私たちを温かく見守り支えてくださいました。ありがとうございます。これから私たちは自分の足で歩み始めます。私達の成長をどうか楽しみに見守っててください。

最後になりますが、私たちの学校生活を支えてくださったすべての方々に改めて御礼申し上げますとともに、本日、御臨席いただきました皆様のご健勝とご多幸、そして高志高等学校・中学校の更なる発展をお祈りし、答辞といたします。

令和五年三月一日

福井県立高志高等学校

第七十四回卒業生代表

清川 藍